【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和５年度学校評価 結果

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	太良町立多良中学校

1　前年度 評価結果の概要	昨年度の重点目標は①魅力ある・分かる授業づくりを推進し、学力の向上を図る。②開発的生徒指導や特別活動、教育相談等の充実を図り、自己肯定感、自己有用感を育てる。③進路学習や道徳教育を中核とした教育活動全般、及び生徒指導の充実を通して、規範意識を高め、豊かな人間力を育成する。の３点であった。すべての項目において、Ａ～Ｂの達成度を得ており、おおむね目標達成ができたとの評価結果であったが、①については、県学習状況調査の結果等を見ると、さらに生徒たちの学習達成に向けて改善する必要があり、今年度は、家庭との連携を強化し、家庭学習をより充実させる仕組みを取り入れていきたい。
2　学校教育目標	**郷土を愛し、自ら学び、仲間とともに伸びる生徒の育成**
3　本年度の重点目標	①　生徒が主体的・対話的に学ぶ、分かる授業を推進し、学力向上（特に知識・技能の定着）を図る。 ②　開発的生徒指導や特別活動、教育相談等の充実を図り、自己肯定感、自己有用感を育てる。 ③　進路学習や道徳教育を中核とした教育活動全般、及び生徒指導の充実を通して、規範意識を高め、豊かな人間力を育成する。

4　重点取組内容・成果指標　　**中間評価**　　**5　最終評価**

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○家庭学習の習慣化	○意識調査で、「家庭での学習の時間が画面を見る時間と同等またはそれ以上」の生徒50%以上を目指す。	・テスト2週間前から家庭学習チェックシートを記入させ、意識の向上を図ると共に、保護者にも確認してもらい、啓発に努める。	A	・日々の宿題の量を調整すると共に、テスト前に家庭学習チェックシートに記入させ、意識の向上を図った。意識調査の結果は目標数値を上回ることができ、全校生徒58.8%という結果であった。今後も継続して取り組みたい。	A	・意識調査の結果は目標数値を上回ることができ、全校生徒66.6%という結果であった。ただし、その中で「よく当てはまる」と回答した生徒は17.2%であり、まだまだ意識の向上を図る方法を探る必要性があると思われる。	A	・目標達成のためには、やはり、生徒の学力向上を支える家庭での学習時間の確保も重要と思う。これまで同様に画面を見る時間を削減する方策の模索に加え、家庭内の事情や生徒と保護者との関係性も考慮してほしい。このような点に留意しながら、特に意識調査で「よく当てはまる」以外の回答をした生徒への個別対応を強化し、家庭学習の質と量の向上を目指してほしい。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○意識調査で、心の教育に対する生徒・保護者のプラス評価が93%以上を目指す。	・学年のスタッフをチームとして全職員が道徳の授業に携わり、生徒の道徳心（道徳的価値）の向上に努める。 ・道徳の指導案や資料を共有し、ICTを利活用して授業の充実を図る。	A	・学校評価アンケートで、道徳教育に力を入れていると感じている割合が生徒97.9%、保護者91.5%である。 ・全国学習状況調査の意識調査で、道徳の授業では自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいると答えた生徒の割合が本校64.9%、全国43.8%である。今後も各学年スタッフが協力して授業を行い、生徒が主体的に考える授業を行っていきたい。 ・指導案や資料を学年の垣根を越えて教材研究に励んでおり、ICTの利活用も行っている。	A	・学校評価アンケートで、道徳教育に力を入れていると感じている割合が生徒96.6%、保護者89.6%である。今後、学級通信等を通じて学校で学んだことを家庭にも返し、価値の共有に努めたい。 ・ふれあい道徳では、各学年の発達段階に合わせた授業を行った。保護者の参観も多く、生徒たちも話し合い活動を通して、友達の様々な意見を聞き、自分の考えを深める授業となった。	A	・生徒一人ひとりの個性と価値観を受け入れ、相互尊重の精神を養い、保護者や家庭との連携を維持されていることは、高く評価できる。このような道徳教育を継続することが重要と思う。また、日常生活の中での小さな出来事を取り上げたり、笑顔での会話をしたりすることを通じて心豊かな生徒づくりを目指してほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的な対応ができていると回答した教員90%以上を目指す。	・生活アンケートを月１回実施し、組織的に情報を共有しながら予防的措置や早期発見、早期対応に努め、適宜教育相談を行う。 ・Q-Uテストを実施し、生徒の学校生活の状況を客観的、個別的に把握することで要支援生徒に対して日常的な支援を行う。 ・保護者との連絡を密に行うなど、小さな情報を見逃さないよう家庭との連携を強化する。 ・毎週行われる職員連絡会や月１回行われる生徒指導協議会において、生徒の様子を報告し合い、全職員で生徒の様子を把握する。	A	・生活アンケートを月１回実施するとともに、いじめに特化したアンケートや教育相談も適宜行い、いじめの早期発見、早期対応に努めることができた。 ・Q-Uテストを１回実施し、学年会などで生徒全体の状況把握を行い、校内研修会において講師からの助言により、個々の生徒のアセスメントに生かすことができた。 ・生徒指導協議会において、生徒の様子を報告し合い、全職員への共通理解・実践を図った。 ・学校評価においての、いじめ対策関連については、満足度が80%以下のため、更に生徒や保護者が満足できるよう取り組んでいきたい。	A	・年間を通して、月１回の生活アンケート等適宜行い、いじめの早期発見、早期対応に努めた。週１回の生徒指導部会や生徒指導協議会等で共通理解をし、全職員で共通した指導を行うことができた。いじめの未然防止に努めていると答えている教員が80%以上と高かった。また、生徒の教師のいじめ防止対策に対する評価は80%以上であり、特に2，3年生においては、85%以上と高かった。しかし、保護者の評価は、80%以下のため、生徒の意識と保護者の意識にずれがある。この部分は、来年度の課題である。	A	・先生方が毎日笑顔で生徒たちと接し、話しやすい関係ができている。そのため、普段の生活から生徒のちょっとした心情の変化や異変に気付き、先生方で情報共有をし、月１回の生活アンケート等を活用しながら、いじめの兆候があれば迅速な対応をされているので、今後ともこのような取り組みを継続していただきたい。先生方や友人が味方となることで、心に不安を覚える生徒にとって学校内で居場所を見つけることができると思う。時には理不尽な言動や危険行為に対しては、叱ることも大事で、毅然とした対応をお願いしたい。
	◎生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・生徒会活動や学級活動、総合的な学習の時間等を活用し、多様な学びの場や体験活動の充実を図る。 ・キャリアパスポートを活用した計画的、継続的な進路学習に取り組み、生徒のキャリア形成を促す。	B	・5月の体育大会や9月の職場体験、修学旅行等の体験活動を通して、生徒1人1人が役割を持つことができた。自分には良いところがあるという意識調査では、78.7%と高い数値ではなかったため、日ごろの教育活動でも取り組んでいきたい。 ・キャリア・パスポートについては、行事ごと生徒に記入させるよう、各担任への声掛けを行う予定である。	B	・年間を通して、生徒会活動や体験活動の中で、生徒1人1人が役割をもち、目標に向かって取り組むことができた。しかし、自分には良いところがあるかという意識調査では、76.8%と高い数値ではなかったため、日ごろの教育活動でも役割と承認を意識した活動を学校全体で図っていきたい。 ・キャリア・パスポートについては、行事や学期末に振り返りを行うことができた。進路に関する学習に対する肯定的回答が85.1%であったため、今後も継続していきたい。	B	・生徒が夢や希望・目標を持ち、それを口に出すことが徐々に難しくなってきている現状だと思うが、先生方には引き続きそれぞれの生徒が自分の輝きを見つけられるようサポートをお願いしたい。また、生徒の自己肯定感・有用感を高めるためには、彼らを褒めて認めてあげることが重要。自主的な活動を通じて生徒が想像以上のことが達成できるよう、引き続き生徒たちとの積極的な関わりと自立を促す環境を整えていただきたい。
	○生徒全員それぞれに出番・役割の創出と自己有用感の向上	○意識調査で、日々の学校生活や生徒会活動など、「何か人のためになることを一つでも自ら行うことができた」生徒80%以上	・学級での活動や生徒会活動、学校行事で生徒一人一人が役割をもち、出番が増えるようにする。 ・生徒会活動を中心に、「気づき、考え、行動する」を念頭に置いた指導を展開していく。	B	・学校行事では、生徒会を中心に企画、運営を行い、一人一人が自分の役割を果たすために努力することができた。コロナが5類へ移行したことを受け、体育大会では、生徒の意見を取り入れた競技が実施できた。 ・「積極的に生徒会活動に参加できた」と回答した生徒が77.4%だったため、生徒会活動の意義についてさらに考えさせたい。	B	・「積極的に生徒会活動に参加できた」と回答した生徒が79.9%だったため、おおむね目標を達成することができた。本年度は24時間チャリティー募金も実施し、生徒の活動の幅を広げることができた。 ・学校をさらに良いものにするために、学校の現状を考え、生徒会活動を通し改善できるところを生徒ともに模索していきたい。	B	・周囲が期待する役割と生徒自身が感じる役割（やりたいことや責任や達成についての感じ方等）が一致しない場合、そのすり合わせは難しいと思うが、目標値を概ね達成していて感心する。先生方の共感やアドバイス、声かけで解決できることが多いと思うので、新生徒会の活動方針「１人１人が元気で笑顔あふれる多良中にしよう」と併せて、目標達成に向けて一致団結して頑張ってもらいたい。
●健康・体つくり	次の中から1つ以上を選択 ❶「運動習慣の改善や定着化」 ❷「望ましい生活習慣の形成」	❶授業以外で運動やスポーツを行う時間が１週間で420分以上の児童生徒80%以上 ❷睡眠の大切さを理解させ、睡眠時間7時間以上が70%以上	❶昼休みに運動場だけでなく、体育館を開放し、気軽に利用できる環境を整える。また、運動を楽しめるような用具を設置し、紹介する。 ❷保健だよりや保健指導で睡眠の大切さを理解させ、過剰なメディア視聴の弊害も伝えていく。	A	❶体育館の開放はできなかったが、外で遊ぶ割合が多くなった。しかし、決まった生徒たちが遊んでいるので、改善が必要である。2学期の後半には、クラスマッチがあり、体育館開放を予定している。 ❷睡眠時間はどの学年も平均7時間以上あり、全校集会、保健だよりなどで睡眠の重要性を知らせることができた。6月に講演会を実施し、メディア視聴の弊害は生徒に分かりやすく伝えていただいた。2学期以降も保健だよりなどでフォローしていく予定である。	A	❶「体育授業以外で体力を向上させるため、1日1時間以上の運動を行った」と回答した生徒が78.2%であった。今後は、生徒会の取り組みで、体育館開放を計画しており、授業と関連して運動の意義を考えさせたい。また、スポーツテストの結果を校内に掲示し、体力要素の高め方を紹介し、意識付けを行いたい。 ❷毎日の健康観察で就寝時刻や時間を書くことによって睡眠の大切さへの意識を高めた。振り返りでは86%の生徒が11時までに就寝する大事さを意識することができていた。また、保健だよりで様々な情報を発信することができた。	A	・健全なる精神は健全なる身体に宿るため、体力の向上は必要。新生徒会の取り組みで、新たに昼休みに体育館開放計画があるので、その実効性に期待したい。また、睡眠時間が長くなってきたのは、帰宅後の時間の過ごし方についてなど、先生方の指導のおかげ。今後とも、継続的に推進していってほしい。
	❸「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	❸「健康に良い食事をしている」児童生徒90%以上	・主に給食時間を利用し、生徒自身が望ましい食習慣を身につけようとする意欲の醸成につなげる。（給食献立表、給食だより、うまかもん給食など）	A	・給食時間での放送、6月の食育月間、毎月の食育便りなどで、望ましい食習慣を身につけようとする意欲の醸成を図ってきた。11月にも食育月間があるので、よりよい食習慣が身につくように、栄養教諭とも協力して、その取り組みを続けていきたい。	A	・給食時間、食育便り、そして、食育月間を活用して、生徒自らが望ましい食習慣を身につけようとする意欲の醸成につなげていった。また、栄養教諭による出前ミニ指導も再開した。今後も、更に良い成果につながるよう、このような取り組みを続けていきたい。	A	・地域産の食材を取り入れた給食は、生徒にとって学校生活の楽しみの一つであり、郷土愛を育む一つの大切な役割を果たしているはず。今後も地域の食材を使った「うまかもん給食」を継続し、生徒たちの郷土愛を育み、そして、食に対する意識と自己管理能力の向上に努めてほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・「定時退勤日（毎週水曜日）」の実効性を高める。 ・運営委員会を更に充実させ、職員会議は主に周知・確認の場として時間短縮を図る。 ・教職員のワークライフバランスを企図し、行事や業務の精選と効率化を推進する。 ・ICTを活用した職員間の情報共有を推進する。	B	・ワークライフバランスを意識した仕事への取組みができているとした教師は71.9%で、職員の意識を高揚させる必要がまだまだある。 ・運営委員会で議案について細部まで検討し練ったことで職員会議は主に周知・確認の場として時間短縮が図られている。 ・「職員掲示板」を新たに設定し、毎日のパソコン起動時に情報共有が図られるように取り組んでいる。	A	・ワークライフバランスを意識した仕事への取組みができているとした教師は81.3%で、中間評価から約10%上昇した。 ・運営委員会で議案について細部まで検討し練ったことで職員会議は主に周知・確認の場として時間短縮が図られた。 ・「職員掲示板」はほぼ全職員が活用できるようになっており、情報の即時周知や共有に寄与している。そのため、職員間の意思疎通がこれまでより早く図られるようになった。	A	・疲れやストレス、加えて家庭環境などの背景が日中の活動や学校生活に影響することは生徒も先生も同じ。保護者は生徒を、先生方が明るい笑顔で迎えてくれることを大前提で学校へ送り出すはず。先生方の健康や心を守ることは管理職の先生の責務。今後も、これらの取り組みを継続・充実させて、先生方のwell-beingの向上と教職を将来の職業として選択する生徒が増えるよう魅力的な職場環境の構築を目指してほしい。
	○家庭・PTA・地域と連携した「開かれた学校づくり」のための工夫・改善及び部活動指導員の充実	○学校行事、授業参観、そしてPTA行事への保護者の参加率40%以上 ○「部活動指導員との協力で業務軽減ができたと感じる教師」80%以上	・各種便り、メール、ホームページやメディア等を活用して、家庭への連絡や情報の発信・提供に努める。 ・学校行事や授業等に外部指導者（地域の方）を講師として招く。 ・部活動において外部指導者との連携を図り、教員の活動への負担感を軽減する。また、部活動の見直しに継続して取り組む。	A	・コロナ感染症が5類に移行したこともあり、生徒にとって有意義な行事等は積極的に取り組んでいる。また、学校メールやホームページを活用して保護者への情報伝達も随時実施した。特に、学級通信においては、QRコードを介して生徒が活動する様子を動画等で視聴できるよう工夫したことが保護者から好評だった。	A	・年間を通して、学校メールやホームページ、担任や学年主任からの通信を活用して保護者への情報伝達も随時実施できた。特に、学級通信においては、全学年がQRコードを介して生徒が活動する様子を動画等で視聴できるよう工夫したことが保護者からも好評だった。 ・役所や地域の有力者とも連携し、総合的な学習の時間や教科（英語、家庭科）の時間に外部人材を講師として招聘し、生徒たちにとって思い出に残る交流ができた。	A	・これからの時代、保護者や地域との連携をより深め、協力して生徒の成長のサポートをすることはとても大事になってきている。そのためにも、学校の様子をわかりやすく周知することが必要。QRコードを用いた生徒活動の動画共有など、文字だけに頼らない学校情報発信の工夫は今後も継続していただきたい。また、外部人材を活用し、様々な経歴を持った人たちとの交流や部活動指導員の充実など今後も積極的にお願いしたい。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
○特別支援教育の充実	○支援が必要な生徒に対する理解に努め、個に応じたきめ細かな対応ができる校内支援体制の構築	○意識調査で、保護者及び教職員の特別支援教育に対するプラス評価85%以上	・個別の支援計画を作成し、校内委員会やケース会議を適宜開催し、職員の共通理解のもと、適切な支援の在り方を探っていく。 ・保護者と連絡を綿密に取り、共通理解のもと支援にあたる。また、必要に応じて関係機関(主治医等)との情報交換や相談を行う。 ・特別支援教育に関する研修会を数回実施し、個々の生徒に対して適切な対応ができるようにする。	A	・職員間で情報と支援のあり方を共有し、共通意識を持って支援・指導をすることができた。 ・特別支援学級で過ごす時、適応指導教室で過ごす時、交流学級で過ごす時、生徒の状況によって担任・学年の職員・支援員で対応をしている。臨機応変に対応できているが、学習状況をどのように改善させていくのかが今後の課題である。	B	・適応指導教室での過ごし方について、職員間で意見交換をしながら形作っていくことができた。生徒の実態把握とともに、今後も職員間の連携を密にして、適応指導教室でのより適切な支援・指導を行いたい。 ・職員の特別支援教育に対する評価は86%で目標を達成しているが、保護者は81.1%(1年78.8% 2年83% 3年81%)であった。特別な支援が必要な生徒への対応ができていないと感じている保護者が2.9%なので、支援のあり方についてもう少し視野を広げ合理的配慮を行う必要があると考える。	B	・生徒一人一人の特性に合わせて、日ごろからきめ細やかな対応はとても大変だと思うが、今後とも継続していただきたい。ただ、中学生や家庭環境は日々変化するので、決して担当者や担任だけの負担にならないよう配慮しながら、未来ある生徒たちへの支援をお願いいたい。
○ICT利活用の推進	○授業や家庭での学習でタブレット活用の積極的推進を図る。	○意識調査で、「日々の学習活動でタブレットを積極的に活用できている」生徒80%以上	・普段の授業の中で積極的に辞書機能等生徒に活用させる。また、ICT推進リーダーとして、積極的に授業で活用し、その実践事例の報告を会議等で行う。そして、教科指導の担当者は、学期に最低1度はタブレットのTEAMS機能を活用した授業実践をすることとする。	A	・推進リーダーが率先してタブレット活用を行い、会議等で事例を紹介することもできた。各教科の取り組みについては、差があるため今後もTeamsの事例等も紹介していきたい。 ・「授業や家庭学習でタブレットを活用する場面が多くなってきた」と回答した生徒が、86.6%であったため、今後も全教員に情報を共有しながら、実践を増やしていきたい。	A	・職員連絡会の時間を使ってミニ研修会をするなどしてICT活用の利便性を職員に伝えることで、職員の活用が若干増えた。Teamsについても特活を中心に活用する機会が増え、生徒のスキルも向上してきている。 ・「授業や家庭学習でタブレットを活用する場面が多くなってきた」と回答した生徒が、90.3%であったため、今後も全教員に情報を発信しながら、実践を増やしていきたい。 ・生徒・保護者・職員へのアンケートはほぼFormsで実施した。	A	・ICTの活用スキルは、現代社会において、これからを生きる生徒たちには必須である。そのため、学校では、ICTリテラシー教育に積極的に取り組んでいただきたい。ただ、ICTを使うことが目的とならないように注意してほしい。やはり、ICTで補えない部分も多々あると思うので、そこもしっかりと見極めながらや学校教育に励んでいただき、学力向上や情操教育にも努めていただきたい。

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	本年度の重点目標は①生徒が主体的・対話的に学ぶ、分かる授業を推進し、学力向上（特に知識・技能の定着）を図る。②開発的生徒指導や特別活動、教育相談等の充実を図り、自己肯定感、自己有用感を育てる。③進路学習や道徳教育を中核とした教育活動全般、及び生徒指導の充実を通して、規範意識を高め、豊かな人間力を育成する。の３点であった。 ①については、自らすすんで日々の授業に取り組んでいると答えた生徒は、82.5%であった。ただし、県学習状況調査の結果を見ると、さらに生徒たちの学習達成に向けて改善する必要があり、今後も、家庭との連携を強化し、家庭学習をより充実させる仕組みを取り入れていきたい。 ②については、生徒指導主事が中心となって、「開発的生徒指導」を合言葉として徹底し、生徒会活動やそれに付随する学校行事等で、生徒主体による活動に重点を置いた。また、教育相談では、定例の教育相談部会だけでなく、個別或いは組織的対応が必要であれば、すぐに部会を開き、生徒にいかに関わっていくか情報共有を実施した。しかし、「自分にはいいところがあると思う」と回答した生徒は中間と比べ約2%下落し76.8%）となったため、より自己肯定感を高められるような取組みが必要である。 ③については、担任を中心として学年職員全員で道徳の授業に計画的に取り組んだ。学年の掲示板にも授業の様子や生徒の感想を掲示し，学年全体で「心の教育」に努めた。意識調査の最終結果，「心の教育に努めている」と肯定的に受け止めている生徒は86.8%，保護者は80.4%，教職員は86.6%であった。今後も校長だより、学年通信、学級通信を通して保護者へ発信しながら，学校全体で「心の教育」に取り組んでいきたい。 次年度に向け、上記の反省と展望を活かして教育活動を意図的に仕組み、学校教育目標の実現につなげていきたい。